

—中国・漢代画像石の比較から—

藤田富士夫

(埋蔵文化財センター所長)

はじめに

最近、中国漢代の壁画や画像石について興味が湧いてきて、手元にある数少ない中国の関連図書をパラパラめくって見た。少しばかり玉器に関心があつて、有名な馬王堆漢墓1号墓出土のT形帛画の、地下世界で絡み合う2匹の龍と環の交叉文様が印象に残った。そのうち中国・江蘇徐州地域の漢代墳墓から出土した画像石にも、同様に2匹の竜が環形の円形文と交叉する図文のあるのを目にした。図文を見ているうちに、そこに日本の「直弧文」のイメージが重なってきた。

直弧文と呼ばれているそれは、かかる中国漢代の「龍」と「環」の文様を投影したものではないだろうかと直感した。直弧文の研究史は長いので、その系譜の検討の中で誰かがすでに適否を考察しているに違いないと思って2～3の概説書をひも解いたが、管見では「龍」や「環」との関連を指摘したものはなかった。

このようなことから、ここに一試考を呈することとした。

画像石の「龍」と「環」文様

まず、筆者の管見にある画像石について紹介したい。

中国・江蘇徐州地域の漢代墳墓から出土した画像石に、2匹の龍が壁形の円形文をくぐり抜ける図文がある。江蘇省文物管理委員で保管する以下の3例が目にとまった(江蘇省 1959年)。(1)徐州・韓樓地区の画像石(第1図1)、「上刻交龍穿環紋」長さ2.16m、高さ0.58mである。(2)徐州・韓樓地区の画像石(第1図2)、「上刻十字連環紋」長さ2.40m、高さ0.58mである。(3)徐州・後周窩地区の画像石(第1図3)、「上刻交龍穿環紋」長さ1.08m、高さ0.51mである。

第1図1・3は、両端に龍頭が描かれていて、2匹の龍が環をくぐり交わる構図である。第1図2では龍頭は見えないが、図文は明らかに第1図1に由来している。また第1図4は、江蘇省銅山県小李村苗山漢墓の後室を飾る画像石「十字連環花紋」(幅0.47m、高さ0.54m)である。これは第1図2と類似したモチーフを呈する。第1図に掲げたそれらを見比べると、2・4の原形が1や3にあることは容易に類推できる。

報告書では、第1図1～3の画像石の出土状態は記述されていないが、第1図4が漢墓石室後室を飾っていることから、同類の用いられ方をしていたと推測できる。

なお、徐州地域にある漢代の磚石墓では、伏羲や女媧、車馬出行図などが描かれていて、それらと同様の昇仙思想などを表わす一連の図文として、上記画像石が用いられている。

直弧文の概観

ここで話題とする直弧文について伊藤玄三氏の著述に詳しい(伊藤 1984年)。伊藤氏は、その起源について、「大正6年の浜田耕作の組帯説以来いくつかの考えが出されてきた。小林行雄があげている主要な説をひけば、浜田の組帯説のほかに西田直二郎の錦綾説、和辻哲郎の漢字説、末永雅雄の皮革縫合説などがあるし、さらには、スイジ貝に起源を求めるものもあった」としている。

そして「直弧文における最古の形態は、現在のところでは吉備方面の墳丘墓出土の特殊器台、楯築弧帯石、さらに近畿地方の古墳出土の特殊器台、纏向の弧文円板などの文様ではないかと考えられる」、「全体としてこの種の文様は墳墓と関連すること、それはまた前述したような政

治的権威の象徴としての文様として存在していたものとみることができよう」、それは「古墳時代の中枢部である畿内方面において使用され、(中略)畿内中央政権の地方への伸張と関わって地方へもたらされ、時には九州装飾古墳の例などをも生み出したものであろうと思う」としている。伊藤氏のこれらの記述に、本稿で論じようとする直弧文の性格は言い尽くされている。

なお、特殊器台の直弧文について近藤義郎氏は「弧帯文」と呼称しており、「文様のうち横方向に走る弧帯文についてみると、立坂型Bの流動性から向木見型の斜線文による停滞性を経て宮山型の煩瑣性、さらに都月型の分割性がうかがわれる。円筒形埴輪・朝顔形埴輪になって文様はほとんど消える」(近藤 1997年)としている。

直弧文と「龍」・「環」

中国・漢代画像石の「上刻交龍穿環紋」や「上刻十字連環紋」、「十字連環花紋」の図文は、いずれも関連しあっていると思われる。「上刻交龍穿環紋」と「上刻十字連環紋」は、ともに高さが0.58mの規格を有し、徐州・韓樓地区の同一墳墓で用いられていた画像石と見ることができよう。また、「上刻交龍穿環紋」と「十字連環花紋」は、河南省登封嵩山大室闕の画像石(第1図5)で共存使用されている。このような事象から、漢代において、「上刻交龍穿環紋」→「上刻十字連環紋」→「十字連環花紋」へと一気にバリエーションを生じ、かつ共存使用されていたと考えることができる。

これら推移過程の中の一部が、直弧文の図文と似る。特殊器台が「流動性」から「分割性」へと推移するとした近藤氏の分析による文様変遷は、江蘇徐州の画像石の第1図1・3から第1図2・4への推移を思わせるところがある。直弧文(弧帯文)は、楯築弥生墳丘墓の弧帯石や立坂B式特殊器台や纏向石塚の弧文円板などに、突如として出現している(第1図6-1~5)。このことは文様出現の契機が、弥生前期や中期の文化要素の中からではなくて、渡来の影響を受けてのものであることを示唆している。

『漢書』によれば、後漢へ弥生時代後期段階の倭国が2度の遣使を送っている。1度目は西暦57年の倭奴国王で、2度目は西暦107年の倭面土国王帥升である。その後には、『三国志』魏書東夷伝が記す景初3年(239年)に始まる一連の魏国に対する「卑弥呼外交」があり、次いで泰始2年(266年)の壺与の西晋への派使がある。

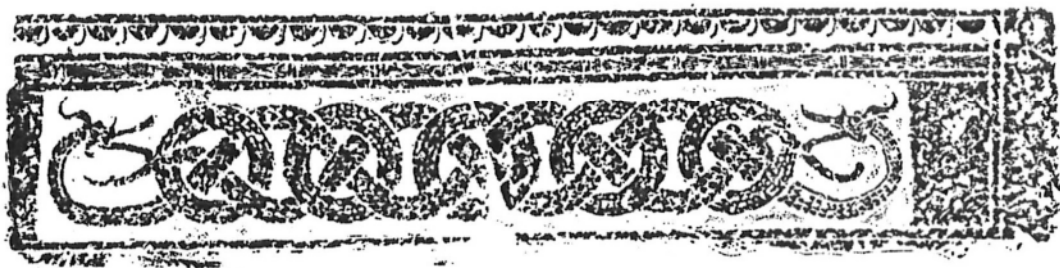
このように後漢に始まる倭国交渉は、続く魏国期に活発化し、西晋期にまで及んでいる。漢代の葬送思想の倭国への伝播は、かかる倭国の活発な外交政策を契機としていたであろうことは想像に難くない。

直弧文が、大陸漢代に盛行した「龍」文様を投影したものとすれば、それが「墳墓と関連する」ものであり、また「政治的権威の象徴としての文様」と見なされていたことが容易に理解できる。そして直弧文で飾った特殊器台を墳丘に立てるのは、青龍に通じる「辟邪」の意味をもつてのことであろう。また、靱形埴輪の中に直弧文をデフォルメしたのが見られる。それは萱振1号墳や宮山古墳などである(第2図1)。靱形は、有名な福岡県うきは市、珍敷塚古墳の壁画にも見られ、「辟邪」の象徴でもある。

中国の龍は、もともとは辟邪や王権のシンボルとしての意味を有している。直弧文にもそれらが思想として反映しているかのように思われる。

「龍」イメージの出現

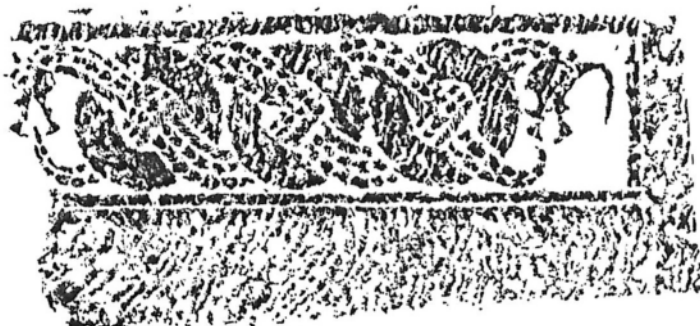
ところで、単体の龍をイメージしたと思われる図文は弥生時代から現れる。大阪府の池上曾根遺跡では弥生V期(1~2世紀)に比定される壺形土器の体部に、流体形に手足をつけた図文が描かれている(第2図3)。かかる、弥生時代の龍文について、佐原真・春成秀爾氏は、「東の方向を鎮める、雨を呼ぶ想像上の動物、青龍が弥生時代に到来したのは、西の方向の白虎、北の方向のからみあった姿の亀と蛇(玄武)、南の方向の朱雀とともに、中国鏡の紋様としてでし



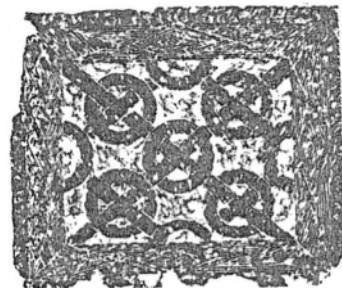
1



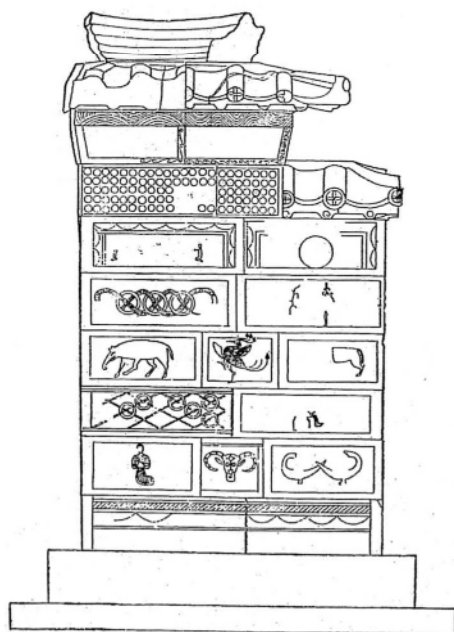
2



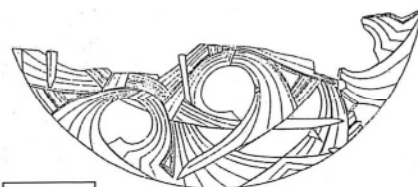
3



4



5



6-1



6-2



6-3

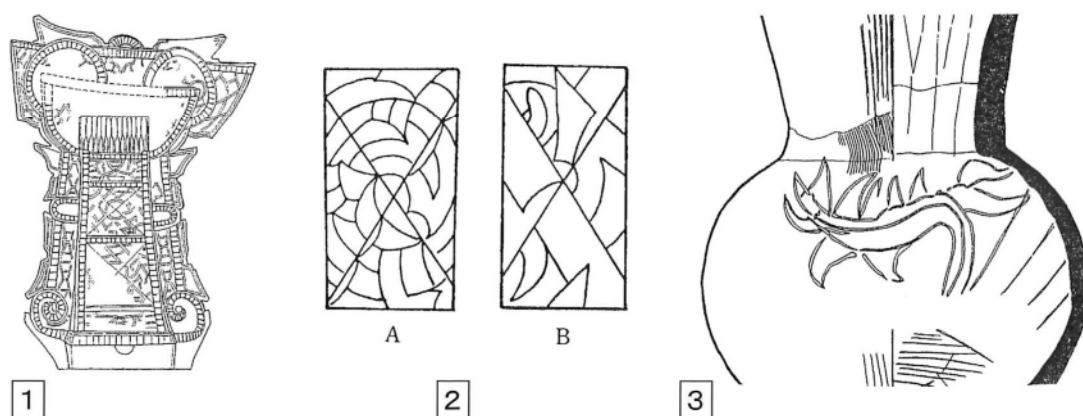


6-4



6-5

第1図 1~4 徐州画像石、5 登封嵩山大室闕、6-1~3 纏向石塚出土、
6-4 楯築墳丘墓出土、6-5 立坂遺跡出土



第2図 1 奈良県宮山古墳の靱形埴輪、2-A・B 熊本県井寺古墳石障の直弧文(鍵手文)

3 池上曾根遺跡の壺形土器(部分)に描かれた「竜」

た。竜を弥生土器に描くことは、大阪で始まり、西は宮崎・福岡・東は愛知におよびました」(佐原・春成 1997 年, 35 頁)と述べている。

池上曾根遺跡の「竜」の手足は、弧状を描く先鋭な爪形をしている。そこに描かれた爪形は、伊藤玄三著『考古学ライブラリー28 直弧文』の表紙を飾る“熊本県井寺古墳主室囲み石の直弧文”と類似する(第2図2)。このことから直弧文は、「竜」のイメージがデフォルメされたものとする事ができよう。列島の「竜」は、漢代の龍文化の影響によって出現したとする見通しを持つことができそうである。

おわりに

弥生時代に出現した「竜」の図文は、中国・漢代に盛行した昇仙思想を背景としているのではないだろうか。その思想は、「画像石」に記された龍を基調とする図文とともに、日本列島へもたらされた可能性があると考えている。確かに「龍」文化は中国大陸で先行し、盛行した思想文化である。直弧文や土器への竜文が「龍」と関わるものであれば、少なくとも東アジア世界からの視点は欠かせないであろう。かかる視点については、すでに論考があつて考証済みであるかも知れない。筆者の管見に無いだけかもしれない。

ここで呈したのは、大雑把でかつ単に類似する文様構成を示すといった点にすぎない。彼等の文物をそれだけで比較するのは無謀の謗りがあるかもしれないが、検討する値はあろうと思っている。現在の私には、これ以上の具体的で合理的な説明ができない。大方のご教示とご批評を乞うものである。

【参考文献】

- 伊藤玄三、1984 年『考古学ライブラリー28 直弧文』ニュー・サイエンス社
 江蘇省文物管理委員會編著、1959 年『考古學專刊乙種第十号號 江蘇徐州漢墓画像石』中國科學院考古研究所編輯・科學出版社出版【参照したのは 1982 年朝日出版社版】
 (財)大阪文化財センター、1979 年『池上遺跡 第2分冊 土器編』
 近藤義郎、1997 年『垣間みた吉備の原始時代』吉備人出版社、145 頁。
 佐原真・春成秀爾、1997 年『歴史発掘5 原始絵画』講談社
 蔣英炬・楊愛国、2003 年『漢代画像石与画像磚』文物出版社
 高橋克壽、1992 年「器材埴輪」『古墳時代の研究9 古墳Ⅲ 埴輪』雄山閣

【挿図出典】第1図1・2・3・4＝江蘇省 1959 年より。第1図5＝蔣・楊 2003 年より。
 第1図6－1～6＝伊藤 1984 年より。第2図1＝高橋 1992 年より。第2図2＝伊藤 1984 年より。第2図3＝(財)大阪文化財 1979 年より。